

## 産業建設常任委員会行政視察報告

1. 視察日程 平成28年9月26日(月)～28日(火)

2. 視察場所 秋田県美郷町、岩手県遠野市

3. 視察参加者 中山田昭徳 二宮健太郎 富来 征一  
小野 義美 田中 正治 阿部 素也  
(随員) 石堂 誠

### 4. 視察事項

#### (1) 秋田県美郷町(生薬栽培について)

美郷町は秋田県の南部、奥羽山脈境に岩手県に隣接し南は横手市に接している。人口20,393人、面積168.36km<sup>2</sup>の町である。冬期は降雪が続き1.5mから2mの積雪になる。

##### 1) 生薬の里・美郷について

生薬を選定した理由

- ①江戸時代美郷町で甘草の栽培が始められ、秋田藩内で広まった史実がある。
- ②龍角散の創始者、藤井会長が美郷町の出身者であること。
- ③高齢化社会の進展により漢方薬の需要が見込まれること。
- ④原料となる生薬は、その大部分を中国に依存しており将来に対する不安が生薬会社等にあること。

##### 2) 保障と取組

平成24年 町長が龍角散を訪問し、甘草の国内生産の共同研究を提案。その後、龍角散と地域活性化包括連携協定を締結。

平成25年 (株)美郷の大地(第三セクター)と薬用植物試験栽培、管理、業務委託契約を締結。町有地にてカンゾウ試験栽培開始。町民に対し、栽培を呼び掛ける広報を開始する。

平成26年 キキョウの試験栽培を開始。

平成27年 エイジツの試験栽培を開始。

平成28年 東京生薬協会と基盤研(国立研究開発法人)と連携協定を締結。

※美郷町で試験栽培に取り組んでいる生薬

カンゾウ、キキョウ、エイジツ（植物名 ノイバラ）  
ユウボク（植物名 ホオノキ）

### 3) 構想の最終目標

耕作放棄地や山林等を活用した生薬栽培の実施、生薬の試験栽培から実用化、生産体制の確立と栽培面積を拡大し、他の生薬メーカーの生薬提携の可能性を検討。



- 4) 「生薬の里 美郷」構想、取組、経緯の説明を受けて試験栽培開始。平成25年から試験栽培（4種類）が1年から3年であり、これから栽培面積を拡大し、町民にも栽培を呼び掛けていると説明があった。カンゾウ・キキョウ・エイジツの乾燥した生薬の原料を見せてもらったが大変な作業で、生薬会社としては1種類の乾燥原料は最低1,000kg必要とされているとのことである。これから5年かけて実体的生産体制を作ると農政課の高橋課長より説明があった。収量から生薬栽培をする農家や生産、皮むき、乾燥等質問があったがいずれもこれからとのことである。美郷町は龍角散の藤井会長の出身地であるので特別待遇で有利ではないかとの質問に職員が頷いていた。

その後、現地の試験栽培地、大台野試験区と平場の森（薬樹園）を視察し、生育情報や“とげのない”エイジツの栽培管理、生育管理について研修を行った。



(2) 岩手県遠野市（遠野市におけるグリーンツーリズムの取組について）

面積約825km<sup>2</sup>（杵築市の約3倍）、人口28,779人（平成27年）、岩手県の内陸部に位置し、県都盛岡市へ70km、東は釜石市、南は奥州市、西には花巻市に接している。気候は県内でも寒冷地帯で寒暖の差が激しく、四季の推移がはっきりしている。冬期の寒い日にはマイナス17℃になることもある。積雪量は意外に少なく、平坦部で15cm程度。遠野市も杵築市と同じく、平成17年10月1日市町村合併により、新遠野市が誕生（合併時の人口31,402人）。四季がはっきりしている自然は、日本の原風景として、全国の多くの人々に親しまれ、「遠野物語」に代表される歴史と文化を活かした観光、交流人口の拡大に取り組んでいる。

1) これまでの取組

平成7年、地元農業者6名による遠野グリーンツーリズム研究会が発足し、都市住民を受け入れる遠野型ワーキングホリデーを実践。平成15年、研究を中心に市内で活動を展開している団体等を包括する、クラスター型（※ブドウの房）の組織体制「NPO法人遠野、山、里、暮らしネットワーク」を設立。平成15年11月「日本のふるさと再生特区」認定で、「どぶろく特区」が全国で特区認定第1号になる。地元では「どべっこ」と呼ぶどぶろくを4軒が製造、販売をしており、それぞれの味が楽しめる。

平成18年、「遠野民泊協会」の設立で、滞在型の交流拡大を展開、同じく18年10月には、遠野ファンクラブ制度と移住・定住を促進する組織、ふるさと遠野定住プラザ「で・くらす遠野」を設立。平成20年、国の3省（農林水産省、文部科学省、総務省）が進めるプロジェクト「先導型モデル地域」として採択を受ける。

2) 遠野ツーリズムによる交流促進（交流人口拡大から定住化へ）

- ①ちよこっと観光ー遠野型ワーキングホリデー～居候型農家民泊
- ②のんびり観光ーワーキングホリデー、体験・体感型
- ③どっぷり観光ー長期滞在型交流

このような都市、農村交流の新しい展開を通じて、移住、定住促進へつなげる。

3) 定住促進組織「で・くらす遠野」

日本全国から「遠野ファン」を獲得するため、「で・くらす遠野市民会員」を募集。現在、47都道府県からファンクラブ会員2,622人（大分県

から14名)。年会費㊦ちよこっと市民1,000円 ㊧のんびり市民5,000円 ㊨どっぷり市民10,000円 特典は㊩会員証 ㊪で・くらす遠野広報紙(年4回) ㊫各種特典発送

4) 認定NPO法人遠野、山、里、暮らしネットワークの主な事業

- ・ワーキングホリデー
- ・東北ツーリズム大学
- ・遠野民泊協会
- ・グリーンツーリズム体験合宿自動車免許
- ・国際交流研修の受け入れ
- ・旅行業務(第3種旅行業)
- ・里山事業
- ・その他

※ネットワークの事業推進の費用は、補助事業、寄付金、事業収益金等で、スタッフ13人で運営している。

5) NPO法人遠野、山、里、暮らしネットワークのコーディネーター浅沼亜希子氏(遠野が好きで移住)より、①～④のこれまでの経過や取り組みについての説明を受け、人、自然、文化を「日本のふるさと遠野」というコンセプトのもと、新しい感覚で交流事業を創り出し、遠野の魅力を全国に情報発信し、定住化へ向けて、市民と行政が一体となって定住促進体制をつくっている。

また、平成23年の東日本大震災の後、遠野市が沿岸部の被災地への全国からの支援物資の供給拠点としての役割と、被災者へ物資を届ける活動を官民一体となって担った。ネットワークでは、被災した方々が安心して住めるまで、見守り活動、コミュニティづくりを継続して実施しているとのこと。

6) 議員の質問

(問) 移住者は(Iターン)はどれくらいいるのか。

(答) 取り組み始めてから、78世帯149人、毎年約10世帯程度。

(問) 企業研修とは。

(答) 廃校を利用した研修施設で、ネットワークがコーディネートした研修内容で実施している。特に富士ゼロックスの新入社員の研修、また、企業の異業種交流研修等をしている。インバウンドに向けた取組は「フェアトレード」等をしている。

7) 所感

遠野市-NPO法人の取組の説明を受け、杵築市の総合戦略の方向性、コンセプトは遠野市とあまり違いはないが、何が不足しているの

かを考えると、官・民一体となった本気度と人材育成、また情報発信力の弱さではないかと思ってしまう。浅沼亜希子氏が「大分県では豊後高田市の担当者や、竹田市の職員とも交流がある」と言っていたが、杵築市の職員も全国で取り組んでいる自治体事例の研究や交流が必要ではないかと実感する。



#### ※岩手県金ヶ崎町

伝統的建造物群保存地区の歴史館で話を聞いたが、地区住民が「観光客が来るのが困る」ということで、町として観光には難しさがあるとの説明。杵築市の城下町でも「伝建保存地区」の指定を受けようとしているが、地区住民としっかり協議していかないと、行政主導では後々問題になる。